

淡雪と明かり

外国語学部
中国語学科3年

小橋 風音

町が海に沈んだみたいに静かな、青くてほの暗い空。とつぷりと灰がかった青に浸ったその景色を、四角く切り取ったような窓から眺めながら、私は蛍光灯の白々しい光の下で右手をくるくる回し続けていた。

最近、仕事でもブライベートでもうんざりすることばかりだった。ストレスは溜まるばかりで、このところ休む間もなく働いている私には、旅行だとか友達と遊びに行くだとかなんて気力は起さず、恋人とも喧嘩をしたばかりなのだ。そこで思い付いたのが、今まさに作らんとしている菓子作りだ。家でできて、甘いものを食べることが出来る、おまけに調理中はストレス発散にもなる。

単純な私は、一石二鳥とも三鳥ともいえる、我ながら良案と思えたこの考えに早速飛びついた。お菓子の土台になるパイ生地は、昨夜仕込みをして、先ほど焼き上がったばかりだ。バター特有の甘ったるい匂いをキッチン中に漂わせている。そして私は今、日ごろの鬱憤を晴らすべく、そしてメレンゲを作る

ため、ボウルの中の卵白を泡立てている。キッチンにしか灯りのともっていない室内に、泡だて器がボウルの底をカシャカシャとひっかく音だけが反響する。ずいぶんと長い時間かき回しているのだが、力任せに泡立てているからか、なかなか思うようにならない。だんだんと腕の力が抜けて、へろへろになってきている。このままでは、完成を待たずに白旗を揚げてしまいそうだ。

空気を包み込むようにかき混ぜる。電動のものがあれば楽なのだけれど、普段あまり凝った料理をしないこのキッチンに、そんな文明はない。いくつかわざわざを検索して再度挑戦する。……よし、今度はうまくいきそう。さっきまで不器用なりにもかき混ぜていたおかげで、コツさえ掴んでしまえば、そう時間は掛からないだろう。頭に浮かぶ幾つものつめたい表情が、メレンゲの上に現れては、空気と一緒にボウルの底に織り込まれていく。仕事の上司、同僚、取引先の職員さん、友達、恋人……次々とぼんやり浮かんで折り返り重なって、

沈んでいった。

料理は、愛情。なんてよく聞くけれど、日ごろ溜まったストレスをそのままぶつけているこのメレンゲ作りは、さながら黒魔術で毒リンゴをこしらえる、あの恐ろしい魔女の気分だ。彼女も今の私と同じように、お姫様へのどす黒い気持ちをリンゴにぶつけていたんだろうか。

「この資料もまとめておいてもらえる？」

「今日までに提出してもらいたい企画書、まだできてないの？」

「会議の日取りがずれたので、プレゼンの用意、至急片付けてくださいね」

「ねえ、まだ終わらないの？」

「こっちだって処理しなきゃならない仕事があるんだよ」

「あのねえ、君。もう少し優先順位を決めて仕事してくれないかな」

あー、うるさいウルサイ。

私の勤め先は、そこそこの名知れた食品関係の企業だ。三年前の就活生だった私は、ほかにいくつか（片手で足りる数だけれど）内定をもらっていたが、待遇もよくて希望通りの職種であるこの会社に就職した。自分の足で成果を上げる、という体育会系なイメージの営業は絶対になじめないと思って、希望したのは経営課。学生時代に簿記や情報処理、会計なんかの商業系の資格を有していたこともあり、仕事はすぐにこなせるようになるだろうと、高を括っていた。しかし、それは大きな間違いだった。

私に加わったのは、経営課といっても企画やマーケティングに特化した係だったのだ。日々山とある企画提出書に、似たり寄ったりなアイデアを書き連ねる。元々頭がさほど柔らかなくない私は、必死に企画案をひねりだすもこの三年でプレゼンを通して上部で提案された案は二・三個だ。就職してしばらくは、上司も「慣れないうちはそんなものだ」と励ましてくれていたが、同期の提案する企画がひとつ、またひとつと通るようになって、さすがに焦りだした。

焦れば焦るほどに思考はこんがらがった糸のよ

うに絡まって、どうしようもなくなってしまう。企画に詰まれば必然、ほかの仕事も停滞していく。そんな悪循環の中、些細なことにも足を取られて、ついには、企画紹介のプレゼンを行う時でさえ、喉がこわばり、足がすくむようになった。

ちようど、今泡立てているメレンゲが空気を食べて膨らんでいくように、不安がゆつくりと首をもたげては、腹の底でこう繰り返ささやくのだ。『ずっと企画が没になっていて、また今回もため息と批判を浴びて終わりかもしれない。いや、そうさ。今から数十分後にはきつとそれが的中して、またあの肺が押しつぶされるような息苦しさがつてくるんだ。……きつと、絶対に来るんだ』

そうして自分を取り囲むすべての人から煙たい視線を向けられているのだという意識にさいなまれて、でもその不安と恐怖に対して卑屈に開き直る自分が、とても、とても嫌いだった。

——すこし、右手に重みが乗ってきかた。メレンゲはもう少しで出来上がるらしい、今までよりも丁寧な、力強くボウルを鳴らす。一心不乱にメレンゲを膨らませるうちに、視界には石鹼泡のような雪の色に埋め尽くされて、さっきまで考えていたことも泡だて器に碎かれて見えなくなっていく。

泡立てが一段落つけば、次に仕込むはクリーム作り。レモンを一つ、皮も全部削って、絞って、バターと一緒に鍋で溶かしていく。生地甘い匂いに、レモンのすうとした香りがキッチンに流れ込んでくる。バターがだんだん形を崩していくにつれて、こっくりとしたにおいに変わっていく。

「あのさ、ほんとにこれからも付き合う気あんの？」
そう言われたのは、何ヵ月前。大口の仕事が入ってきた、ただでさえ慌ただしい仕事が一層猛威を振るって、心身ともに疲弊したところに追い打ちとなつて投げつけられたのだ。その電話のあと、あいつとは一度も連絡を取っていない。

就職してから、私は波のように押し寄せる仕事に舵を奪われて、あいつとの時間を確保するのが難しくなっていたのだ。入社した当初は、お互い初めて覚えること、経験することが多かった。慣れない環境の真つ只中なのだから、逢えなくても仕方がないという少しの諦めと妥協が暗黙のうちにあったのだ。

しかし、半年、一年、二年と経つうちに時間の余裕に差が出てきた。当然のことだが、時間がたてば、新しい環境にもある程度慣れてくる。有名企業の端くれに勤めている私とは違い、公務員の間道を選んだあいつは、徐々に仕事にも、時間にも

ゆとりが生まれ、いつ会えるかと連絡をくれるようになった。

私はその誘いに頭を下げるのがほとんどだった。互いの誕生日だけは忘れずに逢えるようにしていたが、それを差し引いてみれば、ここ数年は年に二、三回も逢えれば良いとこで、メールと電話のやり取りでなんとか二人の距離を埋める（それさえ私を取り合えないことも少なくなかったけれど）、という寂しい関係になっていた。そんな状況を情けなく感じながらも、仕事という逃げの口上に甘んじて一方的に耐えて、許してもらっているつもりでいたのだ。自分がそうやって仕事を盾にして逃げ回っていたあいだ、どんな思いで待っていてくれたのだろう、信じてくれていたのだろう。

どんなに心細かっただろう。

あの日電話越しに聞こえた、呆れたような、怒ったような声はかすかに震えているようにも思えた。やつと休みの重なる日を見つけて、どこに行こうかっていうのまで決めて、ずっと待ってて、楽しみにしていただろうに。約束の日の三日前にかけて電話は、その気持ちをぶん殴って、粉々にするには十分だっただろう。あの言葉の裏に忍んでいた私の裏切りへの叫びに気づかないほど鈍くはな

い。電話越しのくぐもった、感情を必死に押し殺した声が、まだ耳の奥でちらりと聞こえるような気がした。

風が強くなってきたのか、少しだけ開けていた窓ガラスがカタカタと震えている。バターが溶けきつたのを確認して、メレンゲづくりの時に取り出した卵の黄身と砂糖を混ぜて、鍋に少しずつ落とす。温めながらへうで馴染ませると、だんだんクリームのようなつやが出てきた。……うん、そろそろいいかな。

かちり、と火を消して、横に控えていたクッキー色の生地にしゅうろくに入れていく。おお、なんだか黄色い池みたい。このあとは、クリームを冷ますために冷凍庫でしばらく冷やさないといけないらしい。待っているあいだ何しようか。とりあえず鍋やらボウルやらを洗ってしまおう。メレンゲも冷蔵庫に避難しておいたほうがいいかな、とラップ掛けしたボウルを覗く。ん？さっきよりしぼんでる？よくよく見ると、完成した時と今の状態では明らかに二割ほど目減りしている。空気が抜けてしまったのだろう、あちゃあ……メレンゲ作りは最後に回したほうが良かったのか。こういう手際が悪い性格は、早いとこ直さなければいけないんだけれど。慌ててスマホを片手に調べてみると、もう一

度空気を加えれば問題ないみたいだ。よかった、ひとまず安心。それなら、道具を洗ってからまた混ぜ直そう。

水に触れると、さっきまで火の近くにいたこともあって、手の熱が気持ちよく流れ落ちていった。ガチャガチャと金属のぶつかる音を聞きながら手早く洗った物を済ませると、元気をなくしたメレンゲの蘇生に取り掛かった。さっきとおなじように、リビングと窓の外をぼんやり眺めながら右手を休まず動かし続ける。

外はもう完全に真つ暗闇になっていて、ちらほらとビルや近くのマンションの明かりが豆電球のように光っている。あの光の中でも、誰かが仕事に励んだり、今日の晩御飯を子供にせっつかれながら作ったりしてるんだろ。働いたり、家族のためにご飯作ったり、勉強したり、遊んだり、怒ったり、笑ったり……。今、私のキッチンの明かりも、あの明かりのどこからは小さく光って見えるのだろうか。そう考えると、なんか変に寂しいけどあつたかい不思議な感じがした。

——そろそろいいだろうか。さっきまでしょぼく回っていたメレンゲは、めいっばい空気を飲み込んでボウルにこんもりと山を築いている。夏の入

道雲をちぎってきたみたいに白いもこもこは、涼しげに換気扇の風に揺られている。冷凍庫のクリームもそろそろ冷めたころだろう。クッキー生地を載せたバットはきんきんに冷え切っていて、冷気が手のひらに沁みってくる。すごい、レモンクリームはつるりとしていて、磨き上げた鏡みたいにツヤツヤと蛍光灯の明かりを薄く反射している。

あともう少し。その鏡の上に少しずつ雲を乗せていく。ヘラで乗つけては、ちよつとずつ高さを均しながら真っ白の層を重ねていく。せつせとパランスに気をつけながら、ボウルの中のメレンゲ全部を盛り終えると、目の前には丸まったシロクマか、少し背の低いかまぐらのような白い山がどっしりと構えていた。自分のストレスをぶつけないで作ったこのレモンパイは、皮肉なくらい無垢な形をしていて、なんだかおかしい気分だ。とりあえず、結構見た目はいい感じじゃないか？あとは、オープンに入れて、焼き色を付ければ完成だ。

パイをオープンに入れてしばらくすると、砂糖の焼けるこんがりとした甘い匂いが漂ってきた。焼き色を付けるあいだ、私はずっとオープンの前に張り付いてタイマーが切れるまで眺めていた。こういう癖は、どうしてか治らなくて、小さいころからデパ地下の洋菓子店とか、お惣菜コーナー

で時々くっついていているガラス張りの調理室には思わず足が向いてしまうのだ。そして、美味しそうな菓子パンや揚げ物が出来上がるのをまるで魔法でも見たかのように目を輝かせながら眺めてしまうのだ。

その癖が、ただの食い意地から来るのか、乏しいながらも消しがたい好奇心から来るものなのかはわからないが、少なくとも料理には人を惹きつける力があるのだろう。現に慣れないお菓子作りをしている私も、料理の不思議な引力に、助けを求めているのかもしれない。

ピーツ、オープンのブザーが鳴った。

ブザーが鳴りやむのも待たずに扉を開けると、中から砂糖の焦げた香りとバターのとっぴい匂いとが、むつと押し出されてきた。取り出すと、先ほどまで真っ白だった雪山は、ところどころ茶色く雪を溶かしていた。メレンゲに覆われて見えないけれど、レモンの香りも控えめに存在を漂わせている。

ほんとは、粗熱をとるために冷まさなければいけないのだけれど、他人に食べてもらうために作ったものでもなし、さつそく大皿に乗つけて、包丁とフォークを片手にテーブルについた。リビング

はいつのまにか真っ暗になっていて、キッチンのみかりが差し込んでいなければ、足元さえ見えなかっただろう。電気をつけると、リビングに居座っていた暗がりはぱつと窓の外まで追いやられてしまった。

ため息を一つ吐いて椅子に座る。改めてみると、なんか変な感じがする。日ごろのむしゃくしゃを込めて作ったレモンパイだけれど、最終的に出来上がったこのお菓子は、私と正反対のものにも見えるし、自分の甘さや未熟さを体現しているようにもみえる。込めた気持ちは何であれ、心を込めて作ったことには変わりないだろう。今私は、自分の心の一部と向かい合っているのだ。

ゆつくりと包丁を入れると、さくつとメレンゲの崩れる感触が伝わってきた。思っていた以上に崩れやすく、変に包丁を動かせばぼろぼろと零れ落ちてしまうだろう。雪山を慎重に切り進めてゆくと、すこしむにゅつとした感覚のあと、こつん、さくりとパイ生地までたどり着いて真っ二つに。断面は白、黄、茶……とキレイな地層が重なっている。どこまでも整然としていて、外見だけではなく中身まで自分とは対照的なのが、むしろ滑稽にさえ思えてくる。さくりさくりとパイを切り分ける音だけが静かに髪を揺らす。六等分に切り終えると、私はそのうちの一つを小皿に乗つけた。

レモンパイはまだ熱いくらいに温かくて、ひとつ口へ運ぶと、ぬくもりを持ったメレンゲは、熱がほどこけてほろほろと崩れて溶けた。作る順序が前後したからか、ちよつぱり水が出てしまったのだろう、かすかに湿り気を帯びている。あとにはレモンの軽い涼しさと、くしゃつと小さく壊れたパイが舌に残っただけだった。

甘い、湿っぽい、扱いづらくて、脆い……。

味わえば味わうだけ、このレモンパイは私そのものののだと実感してしまう。ひしひしと思い知りながらも私は、フォークを休むことなく動かし、黙々と食べる。私が仕事よりも、恋人よりもまず向き合うべきだったのは、自分自身。自分の甘さから目を背ける奴が、どうして人のことを詰れるというのか。

甘い、甘い、口の中が砂糖で塗り固められたかのような。それでも一つ目を食べ終えて、二つ目、三つ目と食べ進めていく。気づけばもう夕飯時なのに、なぜかレモンパイ以外は胃袋には収める気にならなかった。四つ目を食べ終わるころには、目の奥がツンとして、点々とこぼれた滴が頬をつたっていった。なんだか、ひどくやるせない気持ちでいっぱいになって、残った二切れを見ていたら

無性に会いたくなってしまった。あの電話のあと、結局冷戦状態になってしまったけれど、元気にしているだろうか。多分まだ怒っているだろうな。帰れ、つて突き返されるかもしれない。でも逢わないと。

逢って、ちゃんと謝って、今度こそあの人に笑ってもらえるように。

私は手にしていたフォークを皿の端に置くと、残ったパイもそのままに、電話の応えを待ちながら玄関を飛び出した。目の前はたくさんの明かりが輝きを灯している。

背後ではガシャン、とドアが重く閉じる音だけが聞こえた。